

IEEE R10 SYWL Congress Report 参加報告書

石崎 結敦

IEEE 北海道大学 Student Branch

1 概要

本稿は、IEEE R10 SYWL Congress 2024 の参加報告書である。本 congress は、2024 年 8 月 29 日 (木) から 9 月 1 日 (日) までの 4 日間にわたり、東京都の国立オリンピック記念青少年総合センターにて開催された。R10 の SYWL メンバー約 300 名が一堂に会し、種々の講演やアクティビティ、レクリエーションなどを通して交流を深めた。IEEE では所属会員を地理的に 10 の地域に分類しており、R10 (Region 10) は Asia and Pacific (アジア太平洋地域) を指す。また、SYWL とは、Student Branch (SB), Young Professionals (YP), Women in Engineering (WIE), Life Members (LM) の頭文字を順に並べたものであり、これらの総称である。本報告書では、以下、congress の 4 日間のスケジュール及び参加記録を記し、最後にまとめとして総括を行う。

2 スケジュール

8 月 29 日 (木)	8 月 31 日 (土)
15:00–17:30 Registration and Check in	7:00–8:30 Breakfast
18:00–18:30 Welcome Addresses	8:30–9:00 Keynote Session 2
18:30–21:00 Welcome Reception	9:00–9:45 Member Development Session
	9:45–10:30 Coffee Break
8 月 30 日 (金)	10:30–12:00 Breakout Session 3
7:00–8:30 Breakfast	12:00–13:00 Lunch Break
8:30–9:15 Welcome Session	13:30–15:00 SYWL Joint Session
9:15–10:15 Keynote Session 1	15:00–16:00 Coffee Break
10:15–10:45 Coffee Break	16:00–18:00 Poster Session
10:45–12:00 Plenary Talks	18:00–21:00 Cultural Night
12:00–13:30 Lunch Break	
13:30–15:00 Breakout Session 1	9 月 1 日 (日)
15:00–15:30 Coffee Break	7:00–8:30 Breakfast
15:30–17:00 Breakout Session 2	9:00–10:05 Humanitarian Session
18:00–21:00 Award Night	10:05–10:30 Coffee Break
	10:30–11:50 Closing Session

3 参加記録

本項では、Student Branch (SB) メンバーの視点から見た参加記録を記述する。IEEE 北海道大学 SB からは、Chair 齊藤と Treasurer 石崎の 2 名が参加した。

3.1 1 日目: 8 月 29 日 (木)

3.1.1 Registration

会場となった国立オリンピック記念青少年総合センターは、明治神宮に隣接する東京オリンピック (1964 年) 選手村跡地に建てられた研修施設である。

8 月 29 日の朝、私たちは前泊していたホテルを出た。電車を乗り継ぎ、千代田線代々木公園駅 4 番出口から外に出た。そこから 10 分ほど歩くと正門が見えた。初日の会場は国際交流棟であった。9 時半から 16 時まで、同会場で開催されていた IEEE SBLTW (Student Branch Leadership Training Workshop) に参加した。研究発表におけるプレゼン手法に関するワークショップを通して、日本各地の SB メンバーと交流を深めた。参加者の一部は、引き続き SYWL Congress に参加するため、次の会場へと足を運んだ。

受付で名札と記念品をいただき、その後、宿泊所の部屋の鍵を受け取った。参加者の多くが会場内の施設で寝泊まりすることになっていた。私たちは一旦そこに荷物を置き、R10 SYWL Congress のロゴがプリントされた T シャツに着替えた。会場に戻り、Registration の際に受け取ったチケットとかき氷とを交換した。そのころ、雨が降り始めていた。かき氷にも雨粒が混ざったが、急いで食べきった。Welcome Reception の開始時刻が間近に迫っていたのである。

3.1.2 Welcome Reception

この日の朝、台風 10 号 (サンサン) が非常に強い勢力を保ったまま九州に上陸したとの報道があった。当時の進路予測では、本 congress の最終日である 9 月 1 日 (日) ごろ東京に到達すると予想されていた。式辞では、遠路はるばる会場を訪れた人々に歓迎と感謝の意が述べられるとともに、台風による交通機関への影響に関して二三の注意喚起がなされた。私た



図 1: Welcome Reception

ちは SBLTW で知り合った SB メンバーと同じテーブルを囲み、各々のプラカップにビールを注いで乾杯の音頭を待った。多くの人が本会の開催を祝して短いスピーチを述べた。それを聞いているうちに、気がつくと 1 時間以上が経過していた。ビールの泡はどうも消えてしまっていたが、乾杯の瞬間、会場はにわかに盛り上がった。続いて鏡開きが行われた。ステージの両端に設置された酒樽に、「よいしょー」の掛け声とともに木槌が振り下ろされた。参加者は特製の升を受け取り、柄杓から酒を受けた。食べ物と酒を求める人々は種々の料理が並べられたテーブルの周りにごった返した。会場の前方を獅子舞が練り歩き、場を更に盛り上げた。私たちは合間を見て食べ物を確保した。その後は同じテーブルの面々と心の赴くままに語り合い、21 時ごろ解散となった。

私たちは会場施設の一角にある宿舎で夜を過ごした。会場周辺に住む日本の参加者の中には自宅に戻る人もいた。私は風呂から上がって寝間着に着替えると、ベッドに転がり込んですぐに眠ってしまった。

3.2 2 日目: 8 月 30 日 (金)

3.2.1 午前中の Session

眠りが浅く、夜が明ける前に目が覚めた。せっかくなので構内を歩き回ろうと思ったが、あいにくの雨だった。同じく早起きしていた仲間と鉢合わせ、3 人で朝食会場へ歩いていくと、なんと一番乗りだった。入口の机には弁当が積まれていた。おにぎり 2 つと唐揚げの入ったその弁当と、会場内に並べられていた鶏肉やサラダなどの惣菜を少し取って食べた。

この日の日中はセンター棟の 417 室で活動を行う予定になっていた。私たちは朝食をゆっくり食べた後、歩いてセンター棟に移動した。小雨が降っており、施設にあったシェア傘を利用する人がちらほらいた。417 室は廊下の突き当たりにあった。座席は階段状に並んでいて、収容人数は 300 人とのことだった。正面のスクリーンには、会場にあった Wi-Fi の無線 AP の SSID とパスワードが表示されていた。

Welcome Session が始まった。R10 の Director である橋本 隆子先生による Opening remark を聞いた。

Keynote Session 1 では、現 IEEE President & CEO の Thomas Coughlin 氏によるスピーチが行われた。IEEE は数々の意義深い活動を行っているが、卒業などを機に退会する若い会員が少なくないという問題を抱えている。確かに、卒業する先輩方が membership を継続せず去っていったのを私も見てきた。これに対処するには membership を維持するインセンティブの強化が必須だが、学生に対しては様々なイベント及び会議への参加機会を提供し、社会人に対しては産学連携や最先端技術のキャッチアップの機会を提供することで、これを達成したいという。

続く Plenary Talks でも、IEEE membership の活用に関する話があった。このセッションでは、SYWL の各グループに所属する意義について説明を受けた。また、多様性、インクルージョン及び女性のエンパワーメントに関する IEEE の取り組みが紹介された。

国際交流棟に戻り、昼食を取った。その後、Breakout Session が始まった。Breakout Session は、SB, YP, WIE, LM の 4 つのグループに分かれ (breakout), 各々が別々の活動を行うセッションである。SB のセッション会場は引き続き 417 室だったが、前方の席が空いたため、私たちはそちらの方へと移動した。

3.2.2 Breakout Session

Icebreaking として、Spaghetti Tower Marshmallow Challenge が行われた。参加者は 5 人からなるチーム (所属 section になるべく異なるメンバーを選ぶ) を組み、制限時間内にどれだけ高いタワーを建てられるかを競う。骨組みには乾燥スパゲッティを、ジョイントにはマシュマロを用いる。私の所属したチーム

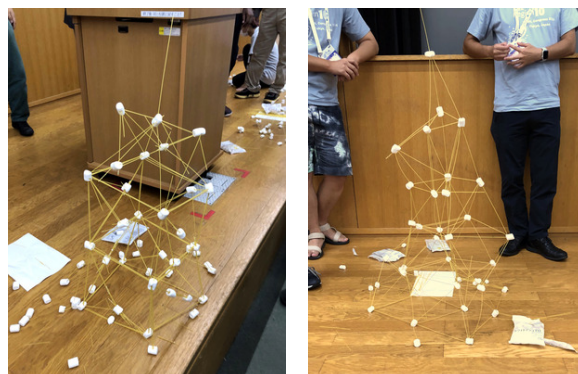


図 2: Spaghetti Marshmallow Tower

では、対角線を張った正方形を組み合わせたタワーを作り、その頂上に避雷針のようなスパゲッティを取り付けて高さを確保した。作業中は英語及び身振り手振りを使って意思疎通を試みた。あっという間に制限時間いっぱいとなった。その時点で最も高かったタワーは私たちの隣で作業していたグループのものであったが、高さを測る前に自重で崩れてしまった。幸運にも私たちのチームが繰り上がり優勝となり、私たちはチームメイトと感謝の気持ちを伝え合った。

小休憩の後、セッションが再開された。Student member が活動で用いるツールやリソースの説明からディープフェイク・人工衛星などの先端技術の話題まで、スピーチのトピックは幅広かった。それらの中でも、Student member がすべき仕事とその方法についてのスピーチに関しては、SB の先輩方から重要な話なのでよく聴いたほうが良いとの忠告を受けたので、特に集中して聴いた。最後に、各地の SB の活動の紹介と、SB event の開催を奨励する話があった。

その後、icebreaking として Cane Passing というゲームが行われた。参加者は輪になって並び、お菓子の杖 (cane) が回ってきたらそれを隣に渡す。音楽が止まったときに杖を持っていた人が「当たり」となる。「当たり」の人は用意された質問に答えなければならないが、その質問は答えが一意に定まる簡単なものではなく、student member 個々人の活動、あるいは DEI (Diversity, Equity and Inclusion) にまつわる個人的な経験及び考えを問うものであった。それらの質問に面食らっていた人もいたが、壇上に立った彼らは自分自身の言葉で真摯に質問に答えていた。

この日の breakout session は以上となった。

S/Y/W/L それぞれの構成員が、組織ごとの活動を通して各人が果たすべき役割を再確認する場となった。

3.2.3 Award Night

私たちは国際交流棟のホールに戻り、Award Nightに参加した。IEEEに貢献した人々がステージ上で表彰された。私たちはそれを見ながら食事を楽しんだ。私は、親しいSBのメンバーと集まって食べていた。その中で、昨晚よりも交流の範囲を広げよう、という声が上がリ、私たちは会場前方にいたJapan Councilの役員の先生方に挨拶をしに行った。現在取り組んでいる研究の内容や将来の展望について尋ねられたので、それについて答えた。国際的な場であるから英語を用いるべきであるとのことで、ここでは英語で応対をした。私たちの話に対する先生方のご指摘は鋭かった。特に、国際的な視点が不足しているとの意見が多く、自分自身の視野の狭さを痛感させられた。最後に激励の言葉をいただき、その晩は解散となった。私たちは宿泊所に戻り、休息を取った。

3.3 3日目: 8月31日(土)

3.3.1 午前中の Session

起きるのが遅かったので、私は朝食会場に一人で向かった。会場に知り合いの姿は見当たらなかった。折り紙を折っている方がいたので話しかけ、そこで弁当を食べた。しばらくその人の折り紙を手伝った。ステージの辺りではKeynote Session 2の準備が着々と進められていた。周りの席が埋まり始めたころ、席を外そうか迷っているうちに、スピーチが始まった。

スピーチは、IEEEはその社会的使命を果たすために一丸となってコミュニティ間の協力及び協調の体制を整えなければならない、という話だった。また、産学連携の一環として、学生が様々なプログラムに公平にアクセスできるようにしたいとのことだった。

引き続き同じ会場でMember Development Sessionが行われた。“President vs R10 Members”と題し、ステージ上にはCoughlin氏を中心としてR10の代表が並んだ。IEEEのmembershipに関する話題が中心となり、それを巡って活発な議論が交わされていた。

3.3.2 Breakout Session

その後、私たちは417室に移動し、3回目のBreakout Sessionに参加した。最初に、グループごとに別々の折り紙を作って交換するicebreakingがあった。私は折り紙が下手なので、オーストラリアから来たという折り紙初体験のメンバーと一緒にうんうんと唸りながら折っていたが、他のメンバーの助けを得て、どうにか「魚」を完成させることができた。

3.3.3 SYWL Joint Session

SYWL Joint Sessionは、S/Y/W/L各組織のメンバーが互いの組織に対する理解を深め、交流を活発化させることを目的としたセッションであった。このセッションでは、“Delusional Best Practices”と題したグループディスカッションが行われた。S/Y/W/Lすべての組織のメンバーと一緒に活躍できるようなイベントを実現可能性に囚われない自由な発想で考えよう、というテーマが与えられた。参加者は6人程度のグループを作って議論を進め、結論をまとめた。

私の参加した班では、パキスタンでロボット会社を経営しているというメンバーが議論を主導し、まず、自身の経験を能弁に語った。私はほとんどの時間、その話を聞き漏らさないように耳をそばだてるので精一杯だった。彼が話し終えた後、彼の経験談にS/Y/W/L各組織のメンバーが登場するように脚色を施していった。最終的に、実感の伴うノンフィクションが芯となったおかげか、おとぎ話のようでありながらリアリティもあるような物語が完成した。

議論を主導した彼は、ディスカッションの最中、「自分はIEEEのコミュニティのおかげで才能を開花させることができた。だからIEEEには感謝してもしきれない」と繰り返し力強く語っていた。彼の言葉の一つ一つには重みがあり、経験と実績によって育まれた健全な自尊心がそれを裏付けているのだろうと思った。彼はまさに、芯の通ったまっすぐな人間であった。一方で、対照的に自分の芯のなさが情けなくなった。議論にまともに参加できなかったのはそのせいだと思って、苦し紛れに「自分も英語でこんなに話せるように頑張りたい」と伝えた。それ

を傍目に見ていた LM の先生は、その後で、英語は単なるコミュニケーションツールであり、ブローキングリッシュでも伝えたいことを伝えられれば良いのだ、と強い口調で断言してくださった。その言葉には、英語は自分の考えを伝えるという目的に対する手段であるはずで、英語で話すこと自体が目的になっているのはおかしい、という意が込められているように感じた。この指摘を受けたのは初めてではなかったが、このときの指摘が最も身に沁みだ。

3.3.4 Poster Session

Poster Session は、各団体の活動をポスター形式で発表するセッションであった。発表のない参加者も多く、そのような人々は様々な発表を見て回りながら、各ブースに設置されたシールを集めるビンゴゲームを楽しんだ。また、軽食の屋台が用意されており、そのチケットを配布しているポスターブースを探し求める参加者も多かった。このセッションは本 congress の中でも特に盛況で、私にとっては、最も多くの人々と会話を交わしたセッションとなった。

私たちは、私たちの所属する Sapporo Section 全体の活動を説明するブースを設置していた。私たちの発表では、昨年度北大の SB メンバーがチームを組んで IEEEExtreme に参加したという部分に関心を持っていただくことが多かった。IEEEExtreme は IEEE が主催する競技プログラミングコンテストで、昨年度(2023 年度)の日本からの参加は北大の 1 チームのみだった。この場での会話を通して、今年は他の日本の大学からも参加予定のチームがあることを知った。

ポスターセッションも後半となり、それまで発表をし続けていた私たちも交代交代で持ち場を離れ、様々なポスターブースを見て回った。様々な活動が世界中で行われていることを知った。多くの人々にこちらから声をかけ、一緒に写真を撮った。Coughlin 氏との写真(図 3 右)もこのときに撮ったものである。人と交流することの楽しさを強く感じた一幕だった。

3.3.5 Cultural Night

息をつく間もなく、Cultural Night が始まった。例年最も盛り上がるとの噂を聞く立食パーティーであ

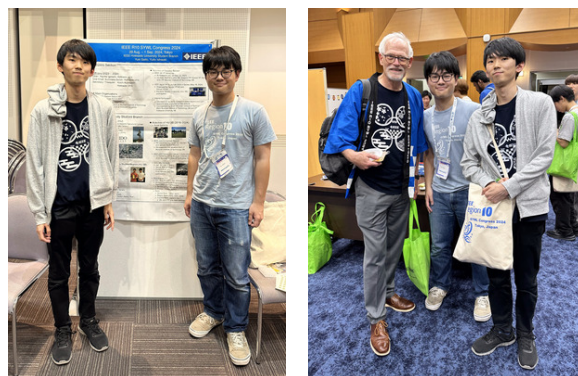


図 3: Poster Session

り、実際、その噂の通りであった。各 section が自らの文化を代表する音楽や踊りを披露した。各国のダンスは、聴衆をも巻き込み、会場の空気を震わすような大盛り上がりとなった。このときばかりは言葉などはまったく障壁にならず、ただ音楽と身体運動が精神の高揚を加速させていた。参加者は音楽が鳴り止んだ後も共鳴するように歓談に耽っていた。その光景は、本 congress を象徴するもののように思えた。

3.4 4 日目: 9 月 1 日(日)

3.4.1 Humanitarian Session

最終日の朝、同じ区画に泊まっていた SB メンバーの代表が各メンバーの部屋を訪れ、忘れ物や掃除の漏れがないことを確かめた。その後、宿泊所の部屋の鍵を返却し、名残惜しくもチェックアウトとなった。

昨晩の余韻が残るなか、Humanitarian Session が始まった。このセッションでは、人や環境に関わる技術についてのプレゼンテーションが続いた。その中で、千葉商科大学の自然エネルギー 100% (RE100) 大学についての取り組みについて紹介があった。環境問題への対処には、技術革新のみならず、それを社会に組み込むためのシステム設計が重要となると考えられるが、この取り組みの中ではフレームワークの作成も行われており、有効性が高いと感じた。

3.4.2 Closing Session

時間が押していたため、休む間もなく Closing Session が始まった。本 congress の 2 日目と 3 日目には、明治大学のキャンパスでロボコンが開催されて



図 4: Cultural Night

いた。私たちの参加したセッションと並行して実施されていたのでその様子を詳しく知ることは叶わなかったが、Closing Session で表彰された人の中には、昨晚の Cultural Night で見かけた人もいた。また、ビンゴカードに書かれた番号が読み上げられ、選ばれた人々が記念品を受け取っていた。最後に会を締めくくる式辞が述べられ、本 congress は幕を閉じた。

SB メンバーの一部に声がかかり、会場の後片付けを手伝うこととなった。2 日目の Breakout Session で組み上げた spaghetti tower の残骸があちこちに散らばっており、これらを拾い集めるのは骨が折れたが、レクリエーションを楽しんだ記憶も同時に甦った。そのころ、国外からの参加者の多くは、特別に用意された東京観光プログラムに参加するために3つのグループに分かれて、既に撤収していた。

観光庁が実施するアンケートに回答し、特製の手ぬぐいをいただいた。様々な柄がプリントされていたので、受け取った人はそれらを広げて見比べていた。

結局、台風 10 号はのろのろと西日本を舐めるように進み、最終日に至っても東京にたどり着くことはなかった。ただ、この日の午後は激しい雨が降った。関西方面の電車が運休になるなどのトラブルもあったが、影響はあったものの無事に帰れたと後から聞いた。私たちの乗った新千歳空港行きの飛行機も、約 40 分の遅延はあったものの、無事空港を発った。

4 まとめ

本 congress は大盛況のうちに幕を閉じた。トラブルが多く、更に不安定な天候も影響し、私たちの過ごした4日間はなかなか慌ただしいものとなった。一方で、他の国際会議とも毛色の違う本 congress に

参加できたことは、一生ものの財産であったと私は思う。この経験を少しずつでも自らの成長の糧とできればよいのだが、今の段階では十分に消化しきれていない部分も多い。ただ、やはりこれらの経験の中でもひときわ印象に残ったのは、意欲と情熱に溢れた同世代の人々との出会いであったと思う。彼らが何かを話すとき、その目はキラキラと輝いていて、まるで瞳の奥に炎が灯っていたかのようなようだった。その一部を、私たちも受け取ることができたと思いたい。また、この経験を語ることによって、再び多くの人にこの灯火を分け与えられることを願っている。

私はこの congress がこれほど活気に満ちたものであるとは事前に知らなかった。最先端の一步先を見据える人々の視座の高さを感じた。あふれるエネルギーをこの肌に浴びた。数多くのセッションを通して、IEEE が私の知らない様々な活動を行っていることを知った。IEEE の存在目的が「人類の利益のために技術革新と技術の向上を促進すること」であることを、改めて噛み締めた。私は、本 congress に参加していた活気ある人々が、人類のためにその力を行使するのであれば、社会の閉塞感や未来への不安といった類のものはすべて打破できてしまうだろうと思った。このような刺激を得たこともあり、私たちとしても、IEEE に関連する活動に参加するモチベーションを高めることができた。また、今回出会った人々との縁は今後とも引き続き大切にしていきたい。

5 謝辞

参加にあたり様々な情報をご提供いただき、旅費の補助などの手厚い支援をいただいた JC SAC の皆様にはこの場を借りて深く感謝申し上げます。